鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要　第４号，51－60，2013

小学校第３学年からの教科「外国語」の実践研究における成果と課題

濵中紀子（HAMANAKA Michiko）
直島町立直島小学校

要約

国際化時代に必要とされるコミュニケーション能力と国際感覚を育むため，小学校第３～６学年に教科として「外国語」を新設し，その教育課程，指導及び評価方法並びに中学校教育課程との接続の在り方について実践研究をした。教育課程の特徴は，「読むこと」「書くこと」を小学校段階から取り入れて４技能の統合的な学びにつなぐこと，小・中学校を貫く「地域発信型単元」を設定し，コミュニケーション能力を育成することである。児童・生徒の理解力や表現力の全体的な向上とともに，学習意欲やコミュニケーションへの積極性などにおいて成果が見られた。

（キーワード：小中連携，文字の導入，地域発信型単元）

１．英語活動スタート（平成６年度）

直島町は瀬戸内海にある人口約 3200 人の小さな島で，その中央部に小学校・中学校が隣接している。近年では現代アートの島として海外からも多くの観光客を迎えるようになり，児童が国際社会に生きることを身近に実感できる環境となった。

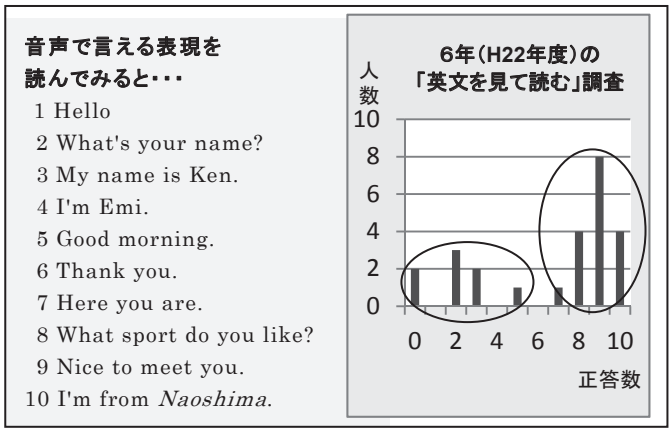
直島小学校では，平成６年度から，文部省指定研究開発学校として，表現力育成の一助にしたいと考えて英語教育に取り組んだ。児童期の特性を生かして英語の音声に親しみ，英語を一つの窓口にして広く世界に目を開き，積極的に人にかかわり合う態度の育成をめざした。音声に対する感覚が優れ，心が柔軟である低学年から英語に触れる機会を設けようと，１年生から６年生まで，週１時間，学級担任と ALT とのティーム・ティーチングで指導するという体制を作った。子ども達は歌やチャンツ，ゲームなどを通して英語に親しみ，英語活動を楽しんだ。

研究終了後も継続実践していたが，高学年の児童の学習意欲が低下してきた。単純な活動の繰り返しではなく，きちんと理解したいと感じる児童も見られた。また，中

学校へ進学した生徒は,「小学校での英語活動は楽しかった。」としながらも，小・中学校の英語学習がつながっている意識は薄く,「読むこと」･「書くこと」･「覚えること」に英語学習の難しさを感じていた。

２.「５・４制」で第６学年の英語学習を変える（平成 14 年度）

平成 14 年度からの文部科学省指定研究開発を機に, 子どもの学習段階と発達段階のギャップを解消するため，小・中学校の一部の教科に５・４制を取り入れた。英語学習においても，第５学年までを前期として，英語によるコミュニケーション能力の素地を養う時期とし，第６学年は中学校英語科への移行期ととらえ，年間 70 時間，中学校の英語教室で中学校教員と ALT で指導することとした。そして，小・中学校の英語学習を連携させるために,「小・中学校のカリキュラム」,「学習スタイル」,「文字」の３点から，小・中学校の段差を改善した。その結果，６年生の学習意欲は全体的に上向いた。また，中学生の学習意欲も,「一時期低下して，その後回復する」ことは同じであったが, その落ち込み方が小さくなった。しかし，文字に関しては１年間では体系的に学習することが十分ではなく，英文を読んだり簡単な語彙を書いたりすることにおいて個人差の広がりが見られた(図１)。



【図１　英文を見て音読できる調査(６年　H22 年度)】

３．教科「外国語」として小中連携（平成 23 年度）

世界のグローバル化とともに，この 10 年くらいの間に，直島町でも日常的に外国の人に接する機会が増え，音声や文字でのコミュニケーション能力や，自他を尊重して共に生きようとする国際感覚を育成することがますます重要になってきた。それは一足飛びに育成されるものではなく，小・中学校の系統的な学びが必要となる。

そこで，平成 23 年度から，文部科学省指定研究開発学校として，「コミュニケーション能力と豊かな国際感覚の育成」をめざし，小学校段階から英語を教科として「学びの連続性・系統性のあるカリキュラム」を作成し，実践に取り組んだ。

これまでの学習の様子や児童の意識調査から，教科「外国語」としてのスタートは，英語学習への意欲が最も高く，活力あふれる時期である第３学年とした。また，その前段階として第１・２学年に，英語の音声に触れコミュニケーション能力の素地を育成する「英語活動」を設定し，小・中学校９年間の英語教育を次のように構想した。

【外国語教育の目標】　**コミュニケーション能力と豊かな国際感覚の育成**

【研究仮説】教科としての外国語の開始時期を小学校第３学年からとし，新設教科「外国語」の教育課程，評価規準等を児童の発達段階や中学校「外国語（英語）」との接続を見据えて作成し実践することで，英語教育としての連続した学びが生まれ，児童生徒のコミュニケーション能力が向上するだろう。

【中学校卒業段階での姿】自分たちのことや地域のことを話題にして英語でやりとりができる
- 相手に関心をもち，英語でコミュニケーションを図ろうとする意欲がある。
- 話題に関連したことを英語で伝えたり尋ねたりできる。
- 多様なものの見方や考え方を理解して共に生きていこうとする国際理解の素地が育っている。
- 自分や地域の将来を見つめ，外国語や関連する学習の学びを活用したり継続したりしようとする態度が見られる。

	学年	目　　標	授業時数	指導者	学習場所
外国語（後期）	９年（中3）	外国語を通じて，言語や文化に対する理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成と，聞くこと・話すこと・読むこと・書くことなどのコミュニケーション能力を総合的・統合的に養う。	160	中学校外国語教員，ALT	中学校英語教室
	８年（中2）		160		
	７年（中1）		160		
	６年		70	中学校外国語教員，ALT，学級担任	
外国語（前期）	５年	外国語を通じて，言語や文化に対する理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成と，聞くことや話すこと，読むこと，書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。	70	小学校外国語専科，ALT，学級担任	小学校国際理解教室
	４年		35	学級担任，ALT	
	３年		35		
英語活動	２年	外国語を通じて，楽しみながらコミュニケーションを図ろうとする素地を養う。	35		
	１年		34		

（１）直島小・中学校外国語学習指導指針を作成

・「外国語」前期は，新たに学習目標と学習内容を作成した。

・「外国語」後期は，学習指導要領の枠を超える言語材料や，言語活動を多様にするために言語使用の場面や言語の働きの例を加筆した。

（２）学習内容

・「英語活動」の学習内容を，「聞くこと」「話すこと」の２領域の言語活動から，また「外国語」の学習内容を「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の４領域の言語活動から設定した。

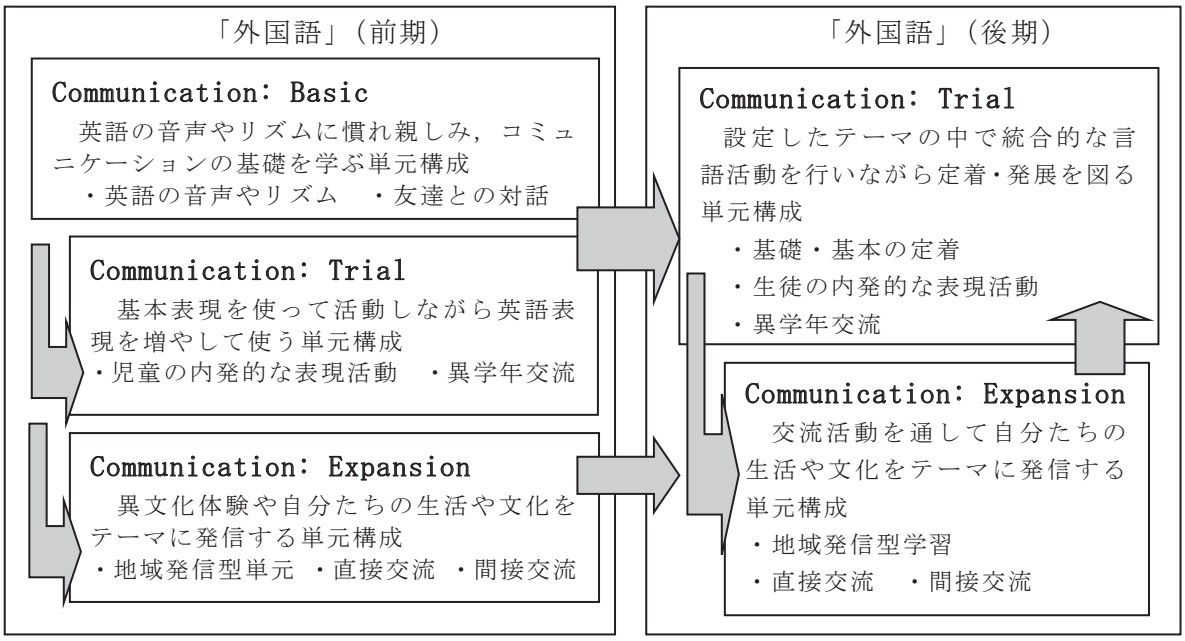
・教科「外国語」では，音声中心の活動を行うとともに，第３学年から音と文字を関連付ける活動を取り入れ，「読むこと」や「書くこと」にも慣れ親しませた。

・後期では，小学校第６学年から中学校第３学年までに，上級学年から学習内容の一部を取り入れて学習内容を４領域の言語活動から整理した。

・前期・後期を通して「地域発信型単元」を設定し，教科や総合的な学習の時間などの既習の学習内容と関連させながら，地域をテーマに発信する言語活動を行った。

（3）単元設定の視点

児童生徒にどんな力を育成するかを明確にして学習内容を単元化するために，大きく３つの視点（Communication: Basic, Communication: Trial, Communication: Expansion）から単元を設定した（図２）。



【図２　３つの単元設定の視点と前期・後期のつながり】

４．「読むこと」「書くこと」の具体的実践

（1）「読むこと」「書くこと」の試案

音声を中心としながらも，アルファベット文字の音を知り，音声と文字をつなぐ体験を積むことで,少しずつ「読むこと」「書くこと」に親しませていくことを小学校段階から担うと考え，試案（図３）を作成して実施した。

「読むこと」「書くこと」(前期)

試案　1・2年 歌やゲームで大文字に親しむ

学年	目　標（まず音声言語に十分に触れることを前提とする）
3年	・アルファベットの大文字，小文字を識別する。
4年	・アルファベットの各文字には音があることを知り，音をつないで身近な単語を読む。
5年	・身近な単語を読んだり視写したりする。 ・「模擬リーディング」をする。

【図３　各学年における文字に関する活動】

（2）実践の様子

1・2年　アルファベットの大文字に親しもう

歌でアルファベット文字の名前に慣れる。

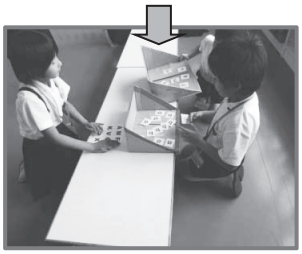
3年　「アルファベットに親しもう」

アルファベットの小文字の名前や形に慣れる。

歌に合わせて体で形を作る。

ストローとモールで小文字を作って形を確かめる。

大文字，小文字でペアを作る。



Do you have “a”?

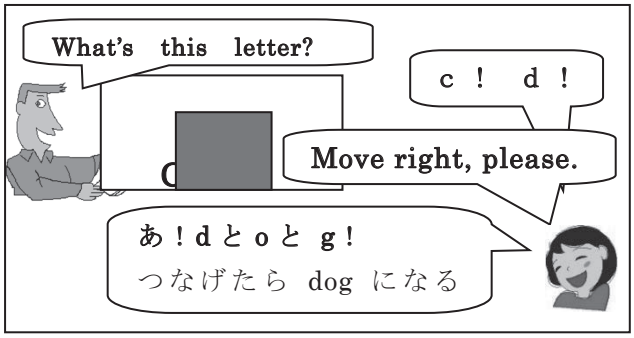
Yes, I do.
Here you are.

Thank you.

自分の名前のアルファベットを集めて，Meet the World で使う自分のネームプレートを作る。

4年　「アルファベットには音がある」

アルファベットには名前と音があることを知り，音に慣れる。

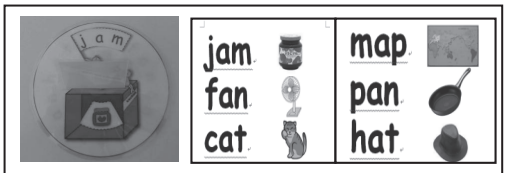


○アルファベットの音を復習する。
○「音の足し算」をする。
○頭文字当てゲームをする。
　monkey, monster, mouse
　What’s the first letter?
○同じアルファベットで始まる語を集める。

5年　「音を足して読んでみよう」

アルファベットの音を足して，身の回りの簡単な単語を読む。

５年生では，フォニックス指導で文字の読み方を練習する単元と，継続的な帯活動を組み合わせて，文字に慣れ，定着を図る。Circle Words Card（「えいごばたけ」よりダウンロード）を使い，短母音をはさむアルファベット３字の語を探して読んでみる。

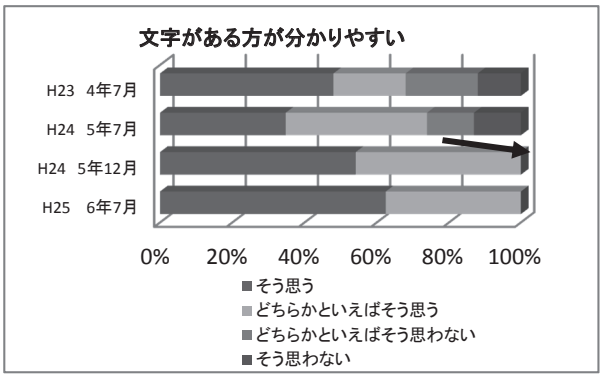


Circle Words Card

また，それぞれの単元の最後には，その単元で使った英語表現をプリントを使って読む練習をする。児童は，発音や強弱，イントネーションを意識して読みながら，音声と文字をつなぐ学習を体験している。

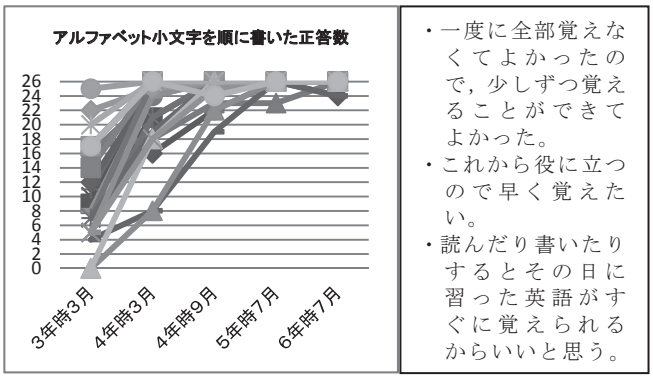
（３）「前期」における児童への効果

歌やアルファベットを使ったゲームなどで少しずつ文字に慣れ親しませることで，文字を学習に取り入れてきた。アンケート調査では，第５学年後半から「文字がある方が分かりやすい」と答える児童が増える（図４）。これは増えてきた英語表現を正確に理解したり，伝えたりしたいと考えるからである。児童からは，「文字がある方がその日に学んだことをすぐ覚えられる。」という声も聞かれた。



【図４　現在の６年生の文字への関心の変化】

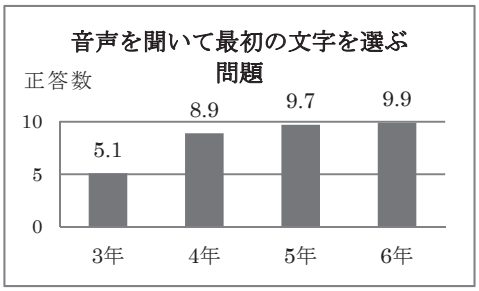
アルファベットの小文字を十分に理解していることが，読んだり書いたりする活動につながると考え，文字指導の試案をもとに，段階的に多様な活動を取り入れた。その結果，現在の６年生は，アルファベットの小文字が定着し，さらに複数のアルファベット文字を速く正確に認識できる力も付いてきた（図５）。



【図５　現在の６年生のアルファベット小文字の正答数の変化】

「単語を５秒間見て記憶して書く調査」（９月）では，ほぼ全員が，pen, key, nose, lion, house など３~５文字の単語を正しく書くことができた。６文字の単語でも，目にすることが多かった tennis については，約７割の児童が正しくつづりを書くことができた。

また，帯活動等で英語の音と文字をつなぐ活動を行うことは，音韻認識力を少しずつ育成することにつながった。３つの単語を聞いて，その音を頼りに最初の文字を選ぶことで，アルファベットの音と文字 のつながりがどの程度理解できているかを調査した。全学年で同じ問題（10問）を行ったが，「音と文字をつなぐ言語活動」を意識的に取り入れている４年生以上の児童では，平均 9.5 文字の正答数があり，より確かな定着が見られる（図６）。



【図６　最初の文字を選ぶ問題に関する学年間の比較】

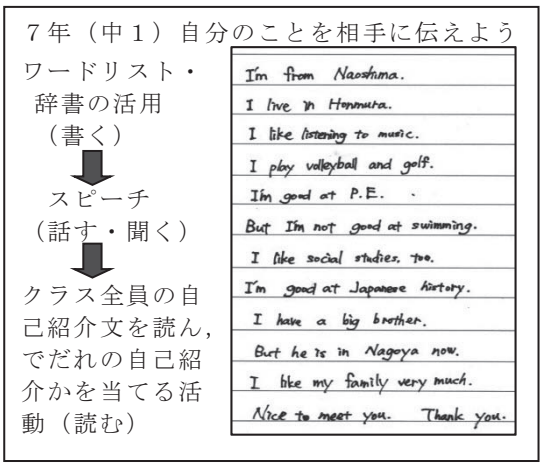
５．　小６と中１のリンクプログラム

第６学年の「教科書を使ったリンクプログラム」では，第７学年（中１）で使用する教科書（Sunshine Book 1）の冒頭３課分を言語活動と関連させて読んだり，辞書として語彙や表現，綴りを調べたりして活用した。第６学年の児童には，「読んだり調

べたりできる」「今後の学習に見通しがもてる」と好評であった。

第７学年（中１）では，最初の 20 時間で，４技能を統合的に用いる言語活動を多く行った。また，第６学年での学習内容を基に「言葉の仕組み」から既習事項を整理するとともに，中学校での学習方法をガイダンスしてから，本格的に中学校の学習内容をスタートさせた。

第６学年の段階で，「身近な語彙をたくさん知っていて，簡単な英語を読んだり視写したりできる」姿を想定して学習内容を設定してきた。児童が感じる「音声と文字をつなぐことの難しさ」が軽減し，文字に慣れることで，中学校第１学年の４月の段階では，平均 10 文程度の自己紹介文を書くことができた。指導者は，統合的な言語活動を進める意図をもって，書いたことをスピーチや互いの自己紹介文を読み合う活動へとつなぐことができた（図７）。

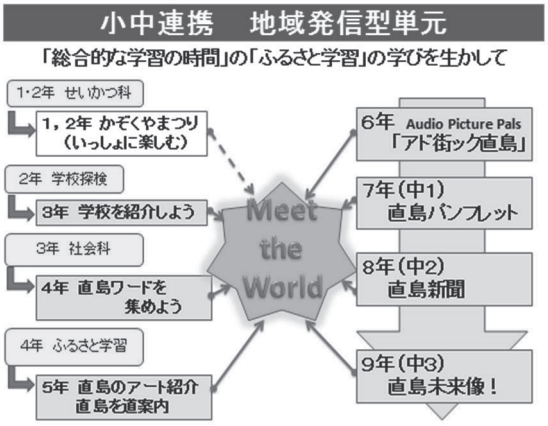


【図７　中１の単元例】

６．地域発信型単元を通したコミュニケーション能力育成

（１）小・中学校単元計画

「地域発信型単元」では，児童・生徒が身近な題材を使って，自分たちのことや学校・地域のことを発信していく。そのため，外国人との交流活動を単元に組み込む。小学校では，総合的な学習の時間におけるふるさと学習や他教科での学びを生かす。中学校では，資料を通して考えを深め，実際の交流を通して自分たちの思いを発信することをめざす（図８）。



【図８　地域発信型単元計画】

地域発信型単元では，各自が「直島ファイル」を作り，学習内容を振り返り，活用できるようにしている。

（２）実践の様子

小３「校内をあんないしよう」

２年生の時に，学校紹介をした経験を活かし，英語で３ヒントクイズを作った。

小４「直島ワードを集めよう」

社会科の学習経験から，地域にあるものを英語で表現した。集めた言葉で，「直島ワードチャンツ」ができた。

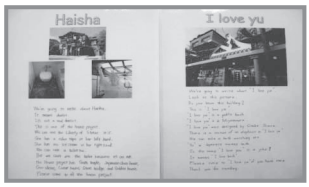
小５「直島のアートをしょうかいしよう」

アート紹介の仕方を学び，実際に現地で外国人に紹介した。

小６「アド街ック直島」

直島町のお勧めの場所を紹介した。

中１「直島紹介ガイドブックを作ろう」



現代アートや自然など自分のお気に入りの場所や直島の見所などをこれまで学習した言語材料を用いてガイドブックにまとめ，紹介した。

中２「直島新聞を作ろう」

タスマニアの学校とスカイプで互いの地域の情報を交換した。

中３「卒業記念を残そう」

小・中９年間の英語学習で学んできたことを卒業文集の形でまとめ，友達同士で読み合った。

７．評価

単元計画・目標
評価の観点ごとに評価規準を作成

→

単元計画・指導案
判断基準
達成してほしい姿
（Ｂ基準）
個への支援

→

授業の評価
自己評価
（Reflection Sheet）
相互評価
パフォーマンス評価

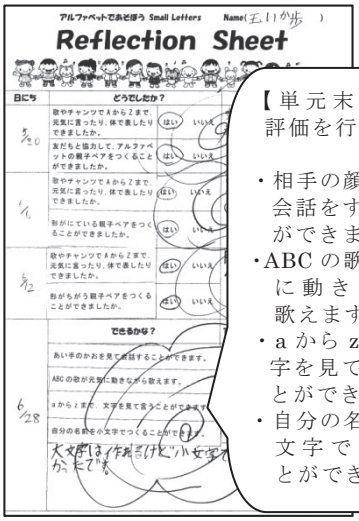
→

事後評価
チェックリスト
（小）
Can-Do リスト
（中）
実技テスト
ペーパーテスト

各単元において，子どもにつけたい力を「評価規準」として設定し，それをどの程度まで習得することをめざすかを判断するものとして，「判断基準」を設けた。この判断基準は全員が到達してほしいＢ判定のみ示し，そこに到達しない場合の支援を示すようにしている。児童生徒は，リフレクションシートなどをもとに学習を振り返り（図９），単元の最後には友達や先生と Can - Do リストなどをもとに確認し合う。

評価規準や判断基準により，この単元を通してどのような力をつけるのか，どのような具体的な姿を求めるのかを指導者も児童・生徒も共通理解することにつながった。

評定に関しては，第３・４学年では，週１時間と時間が少ないこと，行動観察が多く，一人一人を評価することが難しいため達成状況を十分見取ることは難しく，評定しにくい。第５・６学年においては，学習時間が週２時間となり，少人数や一人で表現する場面が増え，一人一人を見取り易くなる。また，相互評価やワークシートを使って理解を深めるなど，評価の場面や方法が多くなり，評定することが可能になる。しかし，自律的な学習者を育成するためには，数値による評定より，絶対評価に基づいて活動場面ごとに，また，観点ごとにフィードバックすることが効果的である。



【単元末に相互評価を行う】

・相手の顔を見て会話をすることができます。
・ABC の歌を元気に動きながら歌えます。
・a から z まで文字を見て言うことができます。
・自分の名前を小文字で作ることができます。

【図９ Reflection Sheet】

８．児童・生徒に見る効果

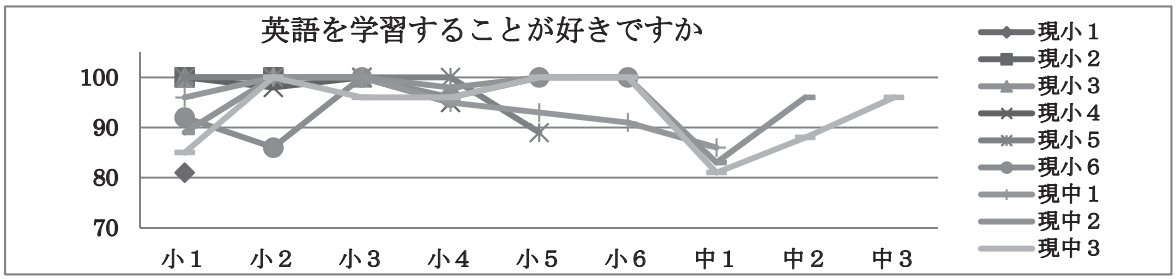
（１）児童・生徒の英語学習への肯定感

平成 25 年度における児童・生徒の英語学習への肯定感を見ると，第６学年，第９学年（中３）ともに全国平均と比較しても非常に高い（表１）。

【表１　「英語を学習することが好き・どちらかというと好き」と答えた割合】

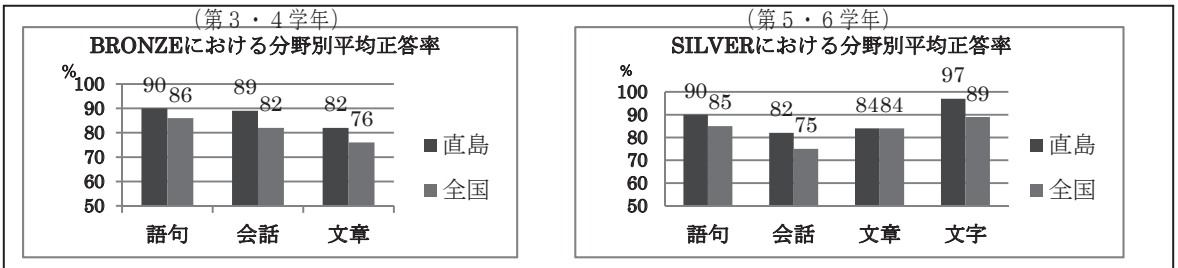
第６学年		第９学年(中３)	
直島小学校	全国平均（H25 全国学力・学習状況調査質問紙）	直島中学校	全国平均（H25 全国学力・学習状況調査質問紙）
100%	76.2%	96.0%	51.6%

現在の第１～９学年（中３）におけるこれまでの英語学習に対する肯定感の変容を見ると，81~100%で推移し，全体的に高い。また，ほとんどの学年が，小学校第３学年時には英語学習への肯定感が 100%であり，高い。中学校第１年時に一度肯定感が下がるが，自律的な学習態度の育成を図ることにより，その後は回復し，向上している（図 10)。



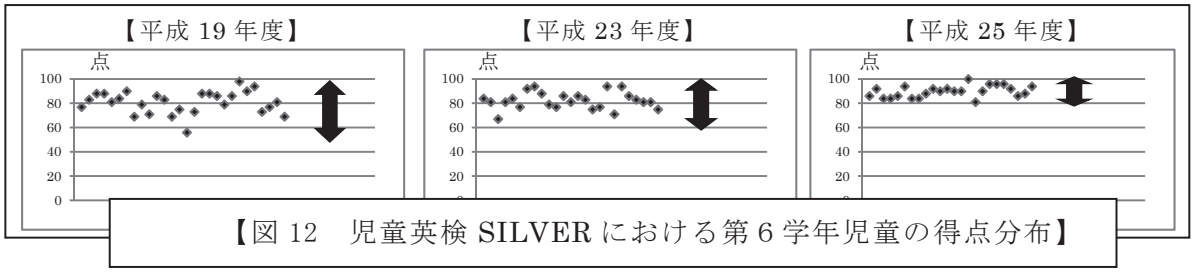
【図 10　「英語を学習することが好き・どちらかというと好き」】

（２）　児童英検における客観的調査に見る「英語を理解する力」



【図 11　児童英検　実施：平成 25 年 10 月　対象：小３から小６】

平成 25 年度に小３～６年が児童英検を受けた結果である。BRONZE，SILVER ともに，「語句」「会話」「文字」において，全国平均よりも得点が高く，理解力の高まりが見られる（図 11)。また，これまでの児童英検 SILVER における第６学年の得点分布を見ると，全体的な得点上昇とともに，ばらつきが小さくなっていることから，全員に基礎的基本的事項が定着してきたと言える（図 12)。



【図 12　児童英検 SILVER における第６学年児童の得点分布】

９．教員研修

年間指導計画に沿って指導するために，特に小学校においては，教員自身が研修を通して，指導に自信をもつことが大切である。そのためには，英語そのもの，また英語授業に少しでも多く接する場，また，理論や指導法を学び合う場が必要である。教員に必要な研修内容を次のように捉え，研修のねらいを明確にして実施した。

○「全体会」（月１回程度）

発達段階に合った外国語教育の理論を研究授業や講演等をもとに学ぶ。

○「Plan 研修」（月１回）

指導目標に沿って年間指導計画を作成する力をつけるために，次月の単元計画，教材・教具などを話し合う。

○「Pre 研修」（研究授業の事前研修として年間９回）

T１として ALT とのティーム・ティーチングで授業をする，または，授業協力者，授業記録者として授業に参加するなど，みんなが授業づくりに加わり，指導の経験を積む。研究授業の事前研修として，児童・生徒役になって言語活動の在り方，教材の有効性を学ぶ(図 13)。

【図 13　「英語で家庭科」の言語活動を実践する教員】

○「英語力・英語運用力向上研修」（放課後の自主研修として月２回程度）

ALT との会話や英語劇等，教員自身が英語に多く触れる。また，クラスルームイングリッシュなど，指導に必要な英語の練習をする。

教員は，研修を通して指導方法を学び，これらの研修が有益であると感じている。教員が指導に慣れるにつれて，課題は「自分自身の英語力や英語運用力を向上させることである」という声が多く聞かれた。

10．成果と課題

学習内容の明確化，指導法の確立，発達段階に沿った段階的な文字の扱いにより児童が英語を理解する力が高まった。また，地域発信型単元等，学んだことを実際に使う場の設定が学習意欲の向上やコミュニケーションへの積極的な態度の育成につながった。

このように，児童・生徒の姿には一定の効果が見られたが，同時に小学校段階では「適切な授業時数」や「評定の在り方」が，小・中接続部分では「中学校第１学年の学習内容をどの程度小学校に取り入れるか」という点が課題となった。今後，比較研究ができる大規模校でのさらなる研究に期待するところである。

今回の研究において，日々の実践を含む校内での研修が，教員の指導力向上につながった。教員が一生懸命取り組むほどに，行きつく課題は教員自身の英語運用力をつけたいという思いであり，小学校の教科化に向けては，指導者の研修がいかに大切であるかが再確認された。